



## 川越の歴史を楽しむ 川越仙波古墳群と新河岸川の舟運

山崎 純子 (川越クラブ)



5月15日(土)お天気もよく、さわやかな午後、第1回お散歩例会が行われた。昨年秋の東京サンライズクラブ30周年の際、同クラブ姉妹提携の京都のクラブとの活動報告を聞き、我がクラブでもやってみよう、と今年取り組んだものだ。幸い身近に講師もいることから川越の歴史、それもあまりポピュラーでないものを、ということで「川越仙波古墳群と新河岸川の舟運」というテーマを講師と相談の上決まった。

講師は神山節夫氏。氏は元々理科系畑、会社退職後現在は少年の頃からの趣味の考古学を生かし活動している。川越市立博物館のボランティアガイド、昨年までは東京国立博物館、現在は国立科学博物館のボランティアガイドをなさり、江戸文化検定、小江戸川越検定などを通して勉強中の方である。

当日は 事前学習 現地見学 というプログラムで始まった。

### 事前学習

ここでは本日訪れない川越東口エリアの旧跡と川越に古墳ができた歴史的な過程、及び新河岸川舟運について説明を聞いた。

#### (1) 川越東口エリアの旧跡

菅原神社(天神社、六塚稲荷神社)

妙善寺(不動明王本尊、川越七福神/毘沙門天、いも地蔵、いも供養)天然寺(大日如来本尊、川越七福神/寿老天、武蔵国一番霊場)

長徳寺(阿弥陀如来本尊、仙波氏館跡、稚児観音)

#### (2) 川越仙波古墳群

縄文時代前期、川越の今の水田地帯は東京湾の最奥部の海であり海の幸に恵まれた集落が営まれていた。それを物語る遺跡が「小仙波貝塚」(小仙波町3-11)であり竪穴式住居で生活をするムラを形成していた。

弥生時代になると入間川、小畦川流域に広大な弥生式集落が稲作文化とともに形成され、「霞ヶ関遺跡」(霞ヶ関駅南の入間川一帯)からは県内屈指の規模の大集落が発見された。織物の存在を示す紡錘車や東海道系と東山道系の文化交流を示す弥生式土器が出土している。

大和政権の国土統一を物語るように、武蔵地方には南武蔵と北武蔵の古墳分布が見られるが川越地方は北武蔵に属する。この地方には「下小坂古墳群」(小畦川左岸)「南大塚古墳群」(入間川右岸)「的場古墳群」(同左岸)、そして東方に荒川水系の沖積地を臨む仙波台地に「仙波古墳」が存在する。出土

した数々の装身具や副葬品は現在川越市立博物館に展示されている。

仙波古墳群は、現在、小仙波町、西小仙波町、仙波町、通町、南通町、菅原町、富士見町を中心に展開しているが近世以降の都市計画により地形は大きく変わり、破壊され消滅した古墳も多いと考えられる。

#### (3) 新河岸川舟運

人は陸路、川越街道、物資は水路、新河岸川で。これが江戸と直結した川越の経済交流と文化交流を支える大動脈である。

川越街道は昔、「江戸街道」と称し現在でも「東京街道」と呼び、江戸時代の名残を留めている。松平信綱を始め川越城主たちは、江戸城の北方、東武蔵野の軍事、経済の基盤を支える道として、川越街道の整備を積極的に行った。

川越・江戸間の道程に譬えた「栗(九里)より(四里)うまい十三里」の宣伝文句は幕末から川越特産のさつま芋の評判を伝えている。実際の川越街道は江戸日本橋から川越まで10里半(約42km)6宿場であった。大井宿は、川越藩主の江戸、川越間往来時や他大名の仙波東照宮参拝時の休憩地としての役を担い、本陣が置かれた。

新河岸川は内川とも呼ばれ、水源は川越市街から4kmにある伊佐沼にある。現在は舟運の行われた時代と様変わりしているが、以前は入間台地の東端を南に多くの蛇行をみながら和光市朝倉の地点で荒川と合流していた。

新河岸河野舟運は寛永15年(1638)1月28日の川越大火で焼失した仙波東照宮の再建資材を寺尾村五反田に荷揚げしたことに始まる。川越藩主松平信綱は北関東の防備の要衝とするため、水路の開設に着眼し軍事的に船路を城下に近づけない、1里離れた新河岸の地を選定し、そこから荒川合流地点まで水量保持のため「九十九曲り」といわれる多くの曲折をつけた大改修工事を行った。

正保4年(1647)現在の新河岸川旭橋周囲に上・下新河岸が開設され、最も城下寄りの扇河岸は天和3年(1683)松平信輝の江戸屋敷類焼後の再建資材運搬のために開設された。領内の蔵米や藩の資材の運搬が任務とされたが、享保期頃(1730年代)になると舟運は川越商人を中心に運営されるようになり、城下町の発展とともに江戸の商業と深い繋がりをもつこととなった。

安永3年（1774）には川越五河岸で合計30軒の船積み問屋が株仲間を結成し、荷物の種類も川越商人や周辺農民の供給に応えた荷物に変化し、甲州や信州からの荷物も運ばれた。

舟運は明治の中頃までこの地方の重要な交通路として大いに貢献した。しかし明治22年、新宿・八王子間に甲武鉄道（現JR中央線）、明治28年国分寺・川越間に川越鉄道（現西武）が開通し更に明治39年には川越電気鉄道（大宮・川越久保町間）が貫通し旅客、商品流通の流れが大きく変わり始めた。大正3年川越街道と新河岸川をほぼ平行して東上鉄道（現東武東上線）が開通し舟運は窮地に追い込まれた。

大正9年、新河岸川の洪水対策として河川工事が始まり、川の蛇行をなくし直線にしたため、川の長さは1/3も短くなり各所で浅瀬が露出した。昭和3～5年改修にともなう運行禁止の県令が出され、昭和6年、工事の完成と共に300年に亘る舟運の歴史を閉じた。

### 現地見学

YMCA川越センターから徒歩20分、丁度よい散歩コース、少し汗ばむ陽の光を受けながら足取り軽く現地見学をした。

#### （1）浅間神社古墳（富士見町21）

浅間神社古墳は“母塚”と称され、高さ5m、径42mの大型円墳で現在頂上に浅間神社が祀られている。墳丘の南側と北側に石段が設置され墳頂部は削平されており、原形は大きく損なわれているが、古墳の裾部には溝が巡らされ部分的に低い場所が認められる。当時の円墳としては規模が大きく築造年代は6世紀中頃と考えられる。

浅間神社では毎年7月13日には、新婚夫婦、赤ちゃんの無事と健康を祈る「初山」という行事が行われている。

#### （2）愛宕神社古墳（富士見町33-1）

愛宕神社古墳は仙波台地の東南端に築かれた“父塚”と称される6世紀中頃の大型円墳であり、現在墳頂には愛宕神社が祀られている。高さ6m、東西径30m、南北径53mを有する二段築成の円墳で幅6mの溝が南東の斜面を除いて巡っ



ている。周辺には「六つ塚」の地名が残り、付近一帯は多くの古墳が存在していたことが伺える。しかし、現存は先の浅間神社古墳と二つのみである。

#### （3）仙波河岸史跡公園



川越市大仙波の愛宕神社、氷川神社の切り通しの急坂を下って通称滝の下と呼ばれる低地に出ると一つの水溜まりがある。これが川越夜舟として有名な新河岸川往来船出の旧跡「仙波河岸跡」である。現在、緑の美しい公園となっており、子ども、お年寄り、働く人々のオアシスとなっている。

明治12年、仙波の滝のある台地の湧水と小川を開削して、それまでの扇河岸から2km上流に仙波河岸が新設された。これにより荷物を馬力で新河岸まで運ぶ手数が省け、駄賃馬の距離が1里半から半分に短縮され、途中の烏頭坂の急坂の困難も解消された。広々とした公園の中を新緑の香りに包まれ、船着き場の跡や小さな滝を見て、心の安らぐひとときだった。

#### （4）氷川神社（仙波4丁目）

「入間郡誌」には仙波氷川神社境内にも2～3基の古墳が存在することが記されている。現在は社殿の西南境内に一基の小円墳が残されている。



仙波氷川神社は仙波河岸に通じる街道の北側に接して、大仙波の村社として慶安元年（1648）の検地帳に記録されており、境内の大樹からも約350年以前の創建が推測される。

川越ワイズから6名、所沢ワイズから3名、ゲスト1名、子ども1名の計11名の参加だった。往復の距離も丁度よく、川越の新しい歴史情報も得られ、更に快い新緑の中を散歩できて楽しい半日だった。センターに帰ってからのアイスクリームがおいしく、成功に終わることができた。さて、今回はどこへ行こうか、楽しみだ。

（川越クラブ：2010年6月プリテン）